HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山路愛山研究序説　ー「惑溺」と「凝固」その（二）
Author(s)	岡, 利郎
Citation	北大法学論集, 26(1), 37-59
Issue Date	1975-07-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16188
Type	departmental bulletin paper
File Information	26(1)_p37-59.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

山路愛山研究序説

――「惑溺」と「凝固」その㈠――

岡利郎

目次

一　生い立ち
二　キリスト教（以上二五巻四号）
三　明治二〇年代（以上本号）
四　「史論」（以下次号）
五　国家と個人

三、明治二〇年代

愛山が著作活動を開始した明治二〇年代とはいかなる時代であったろうか。我々はまず二〇年代を生きた人々がこの時代をどうとらえていたか、を手がかりとして考察してみよう。

「明治二十年代は筆執り物書くものが一斉に進むことの出来たやうな、若々しい一時代であった」[1]「私の文学に志した時代はそれまで埋れて居た自国の古典が日本文学全書、歌学全書等といふ叢書になって毎日の様に出版された最初の時であった。徳川時代の文学、殊に元禄時代の文学があちこちの古い塵埃の中から掘り出されたのもその頃で、近松の浄瑠璃集が出版されたり、西鶴の著作が翻刻されたり、芭蕉その他の蕉門の諸詩人の書きのこしたものが漸く注意される様になったりしてさういふクラッシックの発見だけでも私達青年の受けた刺激は少くなかった。一方には十八世紀の末から十九世紀の初期に亘った欧羅巴の文学が非常に盛な勢で注意されるやうに成った頃でもあって、殆んど私達はそれらの応接に暇がなかった程だ。今日から見れば当時の学芸の世界は言はば処女地とも名づくべきで、国語には統一もなく、新しい詩歌はまだ形すらも具へず一切が実に雑然紛然たる有様ではあったが、しかしその中を開拓して行かうとする人達のはげしい意気込を考へて見たばかりでも何となく爽やかな感じが起って来る」[2]。

これは明治五年生れの島崎藤村が当時を回顧した文の一節であって、やや長きにわたって引用したのは、明治二〇年代の時代精神をいろどる「若々しさ」、清新なロマン的雰囲気――『浪漫派』と称する文芸運動を生まなかったが、むしろ時代精神そのものが浪漫的であった」[3]――が、ここにあざやかに描かれているからである。このような把握は、明治二〇年前後を「明治文学の百川が堤防を切りて一時に氾濫したるが如く、陽春の百花が一時に蕾を破りたるが如く」[4]であったとする坪内逍遙や、「維新改革二十余年ノ歳月ハ我カ明治ノ社会ヲ駆リテ方サニ一歩ヲ転セシメントス。旧日本ノ老人漸ク去リテ新日本ノ少年将ニ来リ、東洋的ノ現像（ママ）漸ク去リテ泰西的ノ現像将ニ来リ、破壊的ノ時代漸ク去リテ建設的ノ時代将ニ来ラントス」[5]という徳富蘇峰にも共通し、そこに我々は、若々しいロマン的雰囲気にあふれた「新日本」[6]としての明治二〇年代のイメージを描くことができる。

だが他方藤村等と同時代人である田岡嶺雲（明治三年生れ）が、明治二八年年頭に書いた次の一文も、二〇年代の一側面を指摘したものとして注目すべきである。

「茲に明治第二十八年の新春を迎へぬ、維新革命と共に新日本は生れたりとすれば、吾日本は正に第二十八の春秋を迎へたるものにして、而立の齢に足らざるもの僅に二、方に精神的成熟の期に達せるものにして、其の独特の識見を立つべきの時なり。顧みて過去二十七年間の経歴を追憶すれば、其初めや日本国民は彼の小児の紅紫紛々たる色彩に目を奪はれて、いまだ自家の人格を認識する力なきが如く、徒らに泰西唯物的文明の光彩に眩惑せられて自国民族の国粋（ナショナリチー〔ママ〕）を自省する能はざりき。明治二十年の比ひ其外馳の心は漸く内に省みるに至り、従来の欧化主義の反動として国粋保存の風潮一時を傾靡せり、実に新日本は、此時を以て冠の齢に達し、青年自識の期に達したるなりき」[7]。

右の田岡のとらえ方は、先の藤村等と重なり合いながらも微妙なズレを見せており、とくに二〇年代の出発点を、「従来の欧化主義の反動として国粋保存の風潮一時を傾靡」したとみている所に、国粋保存派に近い彼自身のバイアスを認めることもできよう。しかしより重要なことは、ここで二〇年代のはじまりが「反動」という語と結びつけられていることであり、実はこの言葉こそ、二〇年代を象徴する「キー・ワード」ともいうべき意味をもっていたのである。

「反動」という語が近代日本の政治評論用語として、いつから使用されはじめたかは明確にはわからないが、明治一八年徳富猪一郎（蘇峰）著「第十九世紀日本ノ青年及其教育」の中に、「大凡物トシテ動カザルハアラズ。既ニ動ケバ復タ反動セザルハナシ。明治の世界ハ反動ノ世界ナリ」[8]という一文がみえる。そして二〇年代に入ると、この語は主に同時代を論ずる評論において頻りに使われるようになった。たとえば「我日本の学者、老人、慷慨家、政治家、

宗教家達は、我文明の余りに疾歩するを憂へて、幾たびか之を障へんとし、之が堤防を築き之が柵門を建られつれど、進歩の勢力は之に激して更に勢を増すのみにして、反動の盛なると共に正動も亦盛にして、今や宛然として欧羅巴ナイズされんとせり」[9]（山路愛山）とか、「欧化主義の跋扈を憤り、外国崇拝者の横行するに慷慨して、社会に現はれ出でたるものを国民主義と言ひ、国粋保存論と言う。……数年来わが国を支配せる風潮は実に前に述べたるがごとくなりしとすれば、その反動の勢い結んで国民主義となり、国粋論となりたるも、あえて怪しむべきにあらざるなり」[10]（植村正久）とか、「繊巧細弱なる文学は端なく江湖の嫌厭を招きて、異しきまでに反動の勢力を現はし来りぬ。……反動は愛山生を載せて走れり。而して今や愛山生は反動を載せて走らんとす」[11]（北村透谷）等、枚挙に暇のない程の多くの使用例がある。なおつけくわえれば、以上の例が蘇峰をはじめ民友社系ないしそれに近い立場にある人々であるのに対し、彼等とは対立的立場にあるとされていた「国民主義」ないし「国粋主義」派においても、たとえば陸羯南が、「事物の変遷は大抵皆な反動の結果ならざるはなし。之を最近に徴するに、一昨年の建白事件、秘密出版は西洋崇拝の勢に反動して起り、保安条例は建白事件秘密出版に反動して起り、昨年の藩閥宿弊論は一昨年の保安条例に反動したるなり。……而して日本主義国粋主義は固より前年の西洋崇拝主義に反動したるなり」[12]といい、「反動的論派は大抵其の正を得ること難し。福沢氏の説実に旧時の思想に反動して起りたるもの多きに似たり」[13]とか、「原動あれば反動あり」[14]といった表現をしばしばしている[15]所をみても、この「反動」という語が、思想流派の区別を超えて、二〇年代の評論に非常に多く使われていることが明らかである。

注意さるべきはこの言葉の意味ないし用法である。まず第一に、右の諸例からもうかがえる通り、当時の「反動」という語は、第一義的には「動」に対する「反動」として、政治的には価値中立的な、力学的イメージをもって使われていた。しかし同時に、力学的イメージをも含みつつ、しかも特殊政治的イデオロギー的意味をもち価値判断をと

もなった「反動」観念が登場しており、それが「保守的反動」として「保守」とワン・セットをなして使われているのである。その最初の例はおそらく徳富蘇峰の次の一文であろう。

「今や社会の大勢将に一変せんとするを知る、世にも恐ろしきは反動の力なり、而して今や反動の大勢漸く成らんとす、而して此の大勢は殊に恐ろしき保守的反動の大勢と云はざる可らず」[16]

ここでは「保守的反動」は「反動」一般と一応区別され、その一種と考えられており、その限り力学的イメージを含んではいるが、しかし他方この「保守的反動」を激成したのは「貴族的急進派」であり「貴族的の急進を排除するは可なり、然れども此れと共に進歩の気運を排除す可らず」[17]、「貴族的急進派の躓きたるは、更に悲む可きことにあらず、然れども保守的反動の大勢の起らんとするは、更に悦ぶ可きことにあらず、……願くは条約改正の中止と共に、第十九世紀新日本進歩の運動をして中止せしむる勿れ」[18]と主張されていることからもわかるように、「保守的反動」は、単なる動に対する反動ではなく、「進歩」との対比において、しかも価値判断を含んで使用されていたのである。この「保守的反動」という語も、蘇峰をはじめ民友社系の人々を中心に多く使われた[19]。たとえば三叉竹越與三郎は、明治二〇年代初頭を「保守的反動の時代」[20]とよんで「欧州三十年間は反動の時代にして、仏国革命の余焔漸く消えて、世、民権自由に熱中する者少なく、君権の勢、漸く回復し来るの影響なり」[21]と欧州の例を引照している。

第二にさらに注目すべきは「反動」が何に対する「反動」であるか、換言すれば「反動」をよびおこした「原動」ないし「動」を何と考えるか、という問題である。前述の諸例をみると、この点については広狭二義の考え方があることがわかる。広義における「反動」は、維新前の日本＝「旧日本」に対して、維新後の日本＝「新日本」を全体としてそれへの「反動」としてとらえる。「明治ノ世界ハ反動ノ世界ナリ」という先の蘇峰の言はその一例であろう。これに対して狭義の「反動」の用法では、欧化主義ないしそれに附随した諸現象に対する「反動」という意味で用いら

れることが多い。ただしこの両者は常に截然と区別されるとは限らない。「欧化主義」は狭義の鹿鳴館時代だけに限らず、むしろ明治維新以後二〇年余のプロセス全体に拡大解釈され、そうした広義の「欧化主義」ないし「文明開花」への「反動」が意識されるようになる。「明治ノ世界ハ反動ノ世界ナリ」といわれる場合、その「明治ノ世界」とはすなわち広義の「欧化主義」「文明開花」にほかならないが、その「文明開花」が「旧日本」への反動であったとすれば、維新以来二〇年の「文明開花」のプロセスへの反動、つまり「旧日本」への「反動」としての「明治ノ世界」＝「文明開花」に対する「反動」(＝再反動)が欧化主義への反動をきっかけとして意識されはじめる。この明治維新以来の広義の「文明開花」全体に対する「反動」が自覚されはじめたこと――明治二〇年代の画期的意義はまさにこの点にあった。[22] それが当時いかに自覚されていたか、竹越三叉の次の文章をみよ。

「顧みて文明開化なる運動が、如何に社会を変化せしかを思はば、殆んど亜非利加の臭蛇が通過する所、草木、花卉、悉く倒壊して余ます所なしと云ふが如きものあり。習慣も、風俗も、美術も、建物も、一切の制度悉く智力てふ怪偉人(ジヤヤント〔ママ〕)の足下に蹂躙せられたり。彼は社会の組織、政体を変革したるのみならず、人々の嗜好をすら一変せり。……文明開化は詩歌の敵にあらざる也。然るに此怪偉人は、詩歌を軽侮して取るに足らざるものとなししかば、詩歌は中央文学界より駆逐せられて、田舎文人の所有物となれり。……建築も然かり。衣服も爾かり。……凡そ社会の感情によりて繋がれ、社会の感情を維持するの具は、一切此怪偉人のために蹂躙せられ、秋風落莫の情に堪へざりき。……是れ決して国民自然の傾向にあらずして、反動の来る、必然の勢也」[23]。

その結果「社会が……詩歌的の感懐を以て、歴史の時代を回顧」[24]しはじめた。すなわち「智力の怪偉人が踏み荒したる秋風落莫の無味社会に飽き果てたる人心」[25]が、「已に忘れたる旧社会を回顧」[26]して「詩歌的の感懐を以て当時の制度風習を想像」[27]し、「霞を隔てて遠山を望み其林間に伏する醜態を見ずして、唯其黛(まゆずみ)に似て美麗なる姿を見るが如く、

旧社会の長所を見て短所を忘れ、其の高尚秀逸詩歌の如くなるを見て、自家の想像力が半ば之を作為したるを忘却」[28]し、こうした「旧社会慕望の念」[29]が「単に美術の上に止まらず、文学の上にも起り」[30]それがさらに社会的諸領域や「政治思想」にもひろがり、こうして「天下已に智力の時代に飽き、将さに感情の時代に入らん」[31]として、二〇年代を迎えたというのである。ここで竹越が「文明開花」への「反動」を「智力の時代」から「感情の時代」への動きとしてとらえ、それを歴史への「回顧」と結びつけている所に注目すべきである。彼は別に「情感の教育」[32]という一文の中でも、「智力が情感を併呑すること」[33]を「脳髄乾燥病」[34]とよんで「当代の文明若し顚覆せば、それ必らず脳髄乾燥病より来らん」[35]といい、「情感の教育」を強調している。

こうした認識が決して竹越一人に限られたものでない一例として、鷹陵外史「情感の世界」[36]という一文は次のようにのべている。

「世に恐ろしきは反動の大勢より甚しきものあらざるべし」[37]と書き出して、「現今反動の模様」を次のように論ずる——文明開化期に西洋の学問思想が移入された結果「旧来の学風」[38]は一変し「虚飾的は則ち実用的となり、快楽的は則ち事務的となりたり。曽て詩巻文集を繙きたるの手は今はミルの経済論オースチンの法律書を繙き、……人は唯だ智識的の動物なり、此の智識さへ開発進歩せば……自由幸福は容易に掬するを得べしと想像せり」[39]。その結果「四面皆無味乾燥の空気にして人、笑はんと欲するも道理の許さざる限りは敢て笑はず、怒らんと欲するも道理の許さざる限りは敢て怒らず……総て道理と共に進退を決せば、実に窮窟の至りなり」[40]。これに対して著者は「人は単に知識的の動物にあらず、……別に一種優美なる性質を有する感情的の天民なり」[41]と主張する。

この著者は文明開化期の「智識」「道理」偏重、「無味乾燥の空気」を明治以前の旧社会に対する「反動」とよんでいるが、著者がその「反動」に対して「情感の世界」を強調するのは、正に「反動」に対する再反動、つまり我々のい

う「文明開化」への「反動」にほかならない。こうして二〇年代においては、前代との対比において「情」を強調する声が高まってくる。たとえば陸羯南も「人生は理を以て処すべきものあり、情に由って行ふべきものあり。……政治なるものは各人理を行ふの場所なり。故に其交渉は理の制裁を主とせざる可らず。之に反して家族及社交なるものは情誼の牽連する所なれば、其交渉は情を主とせざる可らず」[42]という見地から次のように主張している。

「我国を観るに維新以後、家族的生活の要素を政治的生活の要素と分離し、民権自由の論起り、……道理を以て従来の情実を滅却せんことを務め、政治的問題は一々道理を以て之が制裁となすに至れり。……然るに近日に至り此政治的生活の一変は、其波延て家族的生活に及び父子の関係、兄弟の関係、夫婦の関係、主従の関係は尽く破れ……其社会の躰面を乱る殆んど観るに忍ざるものあり。……是畢竟、理、情に克つの弊にして、今より一歩を進めば我国も亦十九世紀無君無父の社会に入らんとす」[43]。

ここでは「理」と「情」がそれぞれ「政治的生活」と「家族的生活」とに結びつけられている点が特徴的であるが、「情」の強調が従来の「理」偏重に対する「反動」であることは明らかであろう。さらに鷗外森林太郎も『しがらみ草紙』の発刊に際して次のように述べている。

「西学の東漸するや、初その物を伝へてその心を伝へず。学は則格物究理、術は則方技兵法、世を挙げて西人の機智の民たるを知りて、その徳義の民たるを知らず。況やその風雅の民たるをや。是に於いてや、世の西学を奉ずるものは、唯利を是れ図り、財にあらでは喜ばず。……天下の人心は殆んど将に彼のプラトオが政策を学びて詩人を逐はんとするに至れり。今や此方嚮は一転して、西方の優美なる文学は、その深遠なる哲理と共に我疆に入り来れり」[44]。

以上みてきた所から明らかになるのは、第一に、二〇年代における「反動」という語の使用は、単にその使用頻度

の高さだけでなく、そこで維新以来二〇年余の「文明開化」全体に対する「反動」が自覚されるにいたったことにおいて、重要な意味をもつことである。ここではじめて、政治的レベルでの個々の反動をこえて、明治維新以来二〇年余のダイナミックな「文明開化」過程＝「動」の全体に対する、全面的なゆれもどし＝「反動」が自覚化されたのであった。第二に、さらに注目すべきは、この「反動」は「智力万能」『理』『道理』偏重、「無味乾燥」な「功利主義」『唯物的文明』『極端実利の乾燥時代』(ドライ・エーガ(ママ))[45]として把握された「文明開化」への「反動」であり、従ってそこでは「情」『感情』「精神的文明」が強調され、時代の精神的気候 mental climate 全体がロマン的しめりを帯びることになったのである。この点は前引の資料からもうかがえるが、なお若干の例をあげれば、田岡嶺雲が「それ明治維新、唯物的文明の潮流、一度日本の思想界に注ぎてより滔々として底止する所を知らず。それ唯物的文明は功利的なり、実用的なり、天地を散文視し、有情を器械視す、智を重むじて情を軽むじ、凡庸を高しとして天品を容れず」[46]とのべている他、宮崎湖処子も「我は唯情に由て活き、由来最も重きを置きし所の智力は、唯情の隷僕に過ぎず、……情は人、人は即ち情なり」[47]といい、愛山も「それ人生の最大動機は情也。悟性も経験も情の前には三尺墻に過ぎざるのみ」[48]と主張している。さらに象徴的な事例として、明治二一年秋には「良心及感情之勢力拡張」を旗印とする『情』という雑誌が発行され[49]、「日本の思想界に於ける情」[50]といった論文も書かれている。

こうした時代的傾向をもっともあざやかに体現しているのが、二〇年代の新しい文学とキリスト教であり、しかも両者は密接に関連していた。周知の通りこの時代は日本近代文学の出発点とされており、従来の伝統的な戯作や一〇年代後半から流行した政治小説にかわって、本文冒頭の藤村の文にもあったように元禄文学を中心とする日本の古典文学の復活＝「発見」があった一方、西欧近代文学の紹介が進み、坪内逍遙「小説神髄」をはじめ、硯友社派をひきいる尾崎紅葉、さらに幸田露伴、森鷗外等のいわゆる逍鷗紅露の四大家につづいて、民友社とその周辺に宮崎湖処子

・矢崎嵯峨の屋・二葉亭四迷・内田魯庵・国木田独歩、さらに北村透谷等の「文学界」派と、さまざまな文学的流派の花がさき、しかも全体としてロマン的雰囲気がただよい「『浪漫派』と称する文芸運動を生まなかったが、むしろ時代精神そのものが浪漫的であった」[51]という状況を出現させたのであった。こうした新しい文学の展開に際してキリスト教の果した役割は、今日我々の想像しうる以上に大きかった。前述したような新しい文学の担い手達の多くは、多少ともキリスト教と関係をもっており、さらにこの時代の指導的なキリスト者自体、内村鑑三や植村正久に代表される如く、文学者ないしジャーナリストとしての側面をもち、日本語訳の聖書や讃美歌それ自体が新しい文学作品としての意味を持ちえたのであった。[52]明治一〇年代末期から二〇年代初頭にかけてのキリスト教の「隆盛」は、一面において欧化主義の時代の波にのったものであると同時に、他面では「文明開化」の「功利主義」「唯物的文明」に対する「反動」として、人間の「内面」や「精神的文明」への関心と結びつき、「精神的革命」の媒介者となり得たのであって、前章でみた愛山のキリスト教信仰もこうした時代的背景の中で一層深く理解されるべきものである。ともあれ二〇年代における新しい文学とキリスト教の展開は、相互に密接に関連しつつ時代精神としてロマン的雰囲気を増幅し、「智力の時代」にかわって「感情の時代」を形成していったのであった。

さらに注意さるべきは、右のことと関連して、二〇年代においては、それまでの政治への価値ないし関心の集中（これは自由民権期の「政治の季節」においてとくに顕著であったが）に対する反動として、政治以外のさまざまな文化領域にも関心が向けられるようになったことである。これはたとえばジャーナリズムの分野において、一〇年代の「政論新聞」の流行に対する、雑誌ジャーナリズムの発展（「雑誌ブーム」とさえいわれる）[53]となって現われている。しかも内容的には一〇年代の「政論」中心に対して、総合雑誌的方向と各種雑誌的方向とが交差しつつ平行的に発展している。[54]たとえば明治二〇年二月創刊の『国民之友』が、その表紙に「政治社会経済及文学之評論」と大書し

ていたのは、総合雑誌化の方向を象徴する一例であろう。他方では「雑誌ブーム」の波にのって、文学雑誌(「我楽多文庫」『しがらみ草紙』『都の花』『早稲田文学」等)、婦人家庭雑誌(「女学雑誌」『以良都女』『婦人矯風会雑誌』『家庭雑誌」等)、少年雑誌(「少年園」『日本之少年』『少国民」等)、宗教雑誌(「真理」『日本評論』『反省会雑誌」等)、専門学術雑誌(「国家学会雑誌』『史学会雑誌」等)、等のさまざまな個別領域毎の雑誌が発刊され(ただし右に名をあげたものの中にも総合雑誌的なものもある)、全体としてバラエティーに富んだ雑誌ジャーナリズムのめざましい展開がみられた。[55]

さらに右と関連して、「中央」への価値や関心の集中に対する反動として、「地方」が注目されはじめたのも、二〇年代においてであった。従来の政治中心的発想がともすると「中央」への集中と連動しやすかったのに対して、たとえば徳富蘇峰等の民友社派は「田舎紳士」の立場を強調し、[56]そこから現われた宮崎湖處子の「帰省」[57]は、田園趣味とロマン主義との結びつきによって世の歓迎をうけた。他方の国粋派においても、東北・北海道・裏日本への強い関心が一貫していた。[58]

とはいってもこの時期において政治への関心が弱まったり後退したわけでは決してない。強い政治的関心が広く存在したが、その内容に若干の変質がみられる。まず第一に外向きの政治への関心は、条約改正問題との関連でしだいにナショナリズムへの傾斜を深め、やがて日清戦後に一挙に前面に出てくる。他方内向きの政治への関心においても変化がおこる。すなわち一〇年代後半自由民権運動との対決をへて、明治政府による国家体制の整備が進み、二〇年代に入って市制・町村制公布、枢密院設置(以上二一年)、大日本帝国憲法公布(二二年)、府県制・郡制公布、教育勅語発布、帝国議会開会(以上二三年)とつづき、明治の天皇制国家体制の基本的枠組が固まった。そこでは政治体制に関する原理的討論がしだいにその政治的意義を失い、無意味化して行く。それを陸羯南は「政治の問題の理論境より実際境に移りたること」[59]としてとらえ、次のようにのべた。

「去十四五年頃の政論盛は即ち盛なりしと雖も、其問題は多く理論の上に往来して、実際の境に入るもの少し。主権論なり、政体論なり、権理論なり、高尚は則ち高尚なりしと雖も、猶ほ欧州学者の抽象的の論議たるを免れずして、実際の財政、外交、農政、兵事の点に於ては却て疎なるの傾きありしなり。然るに近年来の進歩は、実に此理論の境を出でて実際の境に入らんとす」[60]。

興味深いことに、ほぼ同時期に徳富蘇峰もまた羯南とほとんど同趣旨のことを次のようにのべている。「凡そ権理と謂ひ、自由と謂ひ、主権と謂ふが如き、抽象的の政論は、明治十四、五年に於て、天下に雷鳴したるに拘はらず、今日に於ては、最早斯る取り止めもなき空漠たる議論の為に、其熱気を吹く者は、殆んど之れ無きに非ずや。而して未だ曽て聞ゆる事なき所得税と云ひ、地租と云ひ、銀貨流出と云ひ、府県会の制と云ひ、地方制度と云ふが如き、彼の壮士を悩殺せんとする実際上の濃かなる議論は、漸く我邦人の注意を惹くに至りたるに非ずや」[61]。

「国民主義」の理論的指導者陸羯南と「平民主義」の総師徳富蘇峰とが、その一面における対立にもかかわらず、自由民権期「抽象的政論」への「反動」の子として、いかに共通しているかは明白であろう。さらに注目すべきは、こうした「抽象的政論」に対する「実際的政論」の勃興とならんで、二〇年代には、現実政治についての政論を直接ナマの政論としてではなく過去の歴史を媒介として論ずる――「其実ハ論当世政治得失候ものニて、其名目体貌ハ論古也」[62]「歴史は過去の政治にして、政治は現在の歴史なり」[63]――「史論」としての政論が広く行われたことである（これについては次章参照）。

なお以上のような二〇年代「反動」の諸様相全体にかかわる問題として、それが維新変革に直接参与した経験をもたず、維新後の新教育をうけて育ってきた、新しい世代の登場と結びついていたことを見落してはならない。二〇年

代「反動」の一つの特徴は、まさにこの新世代及び世代論的発想との関係にあるのであって、それについての指摘はすでに徳富蘇峰の次のような一文にも示されていた。

「茲に一の注意せざる可らざることあり、曰く人生の変遷是れなり（Change of generation）。今や天保年間封建の天地に産出したるの旧人民は、既に千秋楽を歌て慢幕の中に入らんとするに際し、他の一隅の花道よりは維新世界の風雲を呼吸したる新人民正に式三番を舞ふて出んとす。蓋し我邦は少年の国なり、我が開化は少年の開化なり。……我が人民は少年の人民なり。果して然らば我が政治世界は是れ誰れの世界なるか、吾人は断言す実に少年の世界なることを」[64]。

ここでの世代論的発想はまだ「政治世界」に限られているようであるが、蘇峰の主著「新日本之青年」では次のように展開された。すなわち「青年ハ社会運動ノ旗頭ニ立ツモノ」[65]で「老人ハ秩序ノ味方ニシテ、青年ハ進歩ノ朋友」[66]であるから、「明治ノ青年ハ天保ノ老人ヨリ導カルルモノニアラスシテ、天保ノ老人ヲ導クモノナリ」[67]、他方「平民社会ハ自営自活ノ社会」[68]だから「明治ノ青年ヲ、若シ生活ヲ做サント欲セハ願クハ泰西自活的ノ人トナレ」[69]、しかも「泰西ノ文明ニハ表裏ノ差別アル」[70]から、その「真面目」[71]として「其ノ精神的ノ文明」[72]に注目しなければならない。そこから蘇峰はこうよびかける――「嗟呼我党ノ好青年ヨ、好男子ヨ、若シ卿ノ一歩ヲ転シテ泰西ノ自活社会ニ入ラハ、願クハ卿ノ二歩ヲ転シテ泰西ノ道徳社会ニ入レ。若シ物質的ノ文明ヲ望マハ、更ニ眼ヲ挙テ精神的ノ文明ヲ望メ」[73]。こうして蘇峰は「精神的文明」の主張を「天保老人」に対する「明治青年」＝「新日本之青年」の世代的自己主張と結びつけた。こうした世代論的発想は彼に限らず、二〇年代の政治評論家達の多くに共通していた[74]。前述したような二〇年代「反動」の諸相の展開が、新しい「明治青年」達の世代論的自己主張と連動していたことは、この時代のロマン的雰囲気、「若々しさ」を一層増幅する役割を果した[75]。

最後に last but not least、明治二〇年代が「回顧の時代」『歴史の時代』でもあったことを忘れてはならない。それはまず第一に、前引の竹越三叉の文にあるように「無味乾燥」の「文明開化」に対する「反動」として、「詩歌的の感懐を以て、歴史の時代を回顧」し出したことを意味する。しかし注意すべきは、この歴史的回顧は決して単なる〃なつかしのメロディー〃的な回顧だけを意味したものではないことである。そうした一般的な昔なつかしの回顧を前提しそれと連動しつつ、現実政治への実践的関心に支えられた「回顧」もあったのであり、先にふれた「史論」の流行は、一つにはまさにここにかかわっている。「史論」とは、いわば一方における「詩歌的感懐」にいろどられたロマン的な歴史への関心が、他方における現実政治への実践的関心と結びついた歴史への関心――「其実ハ論当世政治得失候ものニて、其名目体貌ハ論古也」『歴史は過去の政治にして、政治は現在の歴史なり』――と交錯し切り結んだ所に、はじめて成立するものに他ならない(この点後章参照)。ともあれ二〇年代が「歴史の時代」たりえたのは、維新以来二〇年余の歳月が、幕末維新の激動の過程を、より冷静に客観的に距離をおいて detached 眺めうる余裕を与えた、という事情にもとづく。幕末維新期について論ずることが直接ナマの政治的意味をもつ、という時代がようやく終ろうとしていた。そのことが前述した国家体制の枠組の完成ないし安定化と表裏をなしていることはいうまでもない。そこで従来明治政府によってオーソライズされた「王政復古」史観の下で、ともすれば悪玉扱いされ息をひそめていた旧幕府関係者ないしそれに近い立場の人々が、多少とも名誉回復の願いをこめて、幕末維新期の回想や実録を書きはじめる。そのはしりというべきが明治二〇年発表された島田三郎著「開国始末・井伊掃部頭直弼伝」であり、これはその緒言に「予嘗て近世の史伝を読み、其謬妄極めて多きを見、特に史氏が偏僻の見を持し、想像の寃を人の尸上に被らしめて、後人の嘗て之を弁ずるなきに至り、慨然嘆息して為めに其事実を直書し、是を是とし非を非として真相を来者に示さんと欲するの念を発し、最も井伊直弼の事に感ずるあり」[76]とあるように、従来「国賊」とまでい

われていた井伊直弼の復権を一つの意図としていた。翌二一年には、それに対する反論の意もこめて、内藤耻叟著「開国起源安政紀事」が刊行され、以後同種の本が次々と刊行された。

たとえば岡本武雄「王政復古戊辰始末」(二一年)、勝海舟「陸軍歴史」「海軍歴史」(二二年)、勝海舟「吹塵録」(二三年)、木村芥舟「三十年史」(二四年)、そして二五年から二七年にかけては、桜痴居士福地源一郎の一連の回想録——「幕府衰亡論」「懐往事談」「新聞紙実歴」——が相ついで『国民之友』誌上に発表され(後に単行本としても刊行)、栗本鋤雲「匏庵十種」、勝海舟「開国起原」等と合せて、一つのピークに達した感がある。なおこの間二二年には、栗本鋤雲・内藤耻叟等を幹事として江戸会が結成され、機関紙『江戸会雑誌』(後『江戸会誌』と改題)が刊行されている。(77)

もちろんこうした書物は佐幕派だけに限られない。徳富蘇峰等が編纂した「小楠遺稿」(民友社刊二二年)をはじめ、吉田松陰、西郷隆盛、平野国臣といった志士の伝記、江藤新平の「南白遺稿」(二五年)等の遺稿類や、海江田信義「維新前後実歴史伝」(二四～二五年)等の回想談、野史台「維新史料」(二〇年以後)等の史料収集と、広い範囲にわたって存在する。

さらに注目すべきは関心の対象が幕末維新期から江戸時代全体へと広がって行き、内藤耻叟「徳川十五代史」、三上参次「白河楽翁と徳川時代」、吉田東伍「徳川政教考」等の諸書が現われたことである。これは文明開化期において、江戸時代がもっぱら否定の対象としてとらえられていたことへの「反動」を意味すると共に、前述したような明治天皇制国家体制の枠組の完成にともない、この国家体制との比較対照においてあらためて江戸時代をとらえかえそうとする志向の現われでもあった。二〇年余の年月の距離をおいて江戸時代を客観的に見直した時、そこに新たな意味付けがなされるのであって、ついには次のような発言がなされるにいたった。(78)

「我邦の文明は、徳川時代に於て、既に其の絶頂に達したり。政治、文学、美術、工芸一として皆な然らざるは

なし。新日本と旧日本とは、劃然たる別物にあらず。吾人は如何に大なる自由を欲するも、歴史の外に超出する能はざる也。既往を知らざれば、以て将来を卜す可らず。吾人此に於て徳川時代歴史研究の最も今日に必要なるを見る也」[79]。

ここにいたって「旧弊」「野蛮」の社会として江戸時代の社会をとらえてきた文明開化期への「反動」は、「其の絶頂に達した」のであった。

こうして幕末維新期から江戸時代へと視野を広げていった歴史への関心は、やがて一方では、江戸時代からさらにさかのぼって日本歴史全体へ[80]、他方では維新以後二〇年代にいたる「現代史」「同時代史」[81]へと、全面的に視野を拡大し、ここに近代日本におけるいわば最初の「歴史ブーム」が出現した。その意味はもとより多義的であって、たとえば「旧日本」をもっぱら否定的な眼でみてきた「文明開化」への「反動」であると同時に、幕末以来の「開国」による西欧との急激な文化接触の後に、ようやく自らの Cultural Identity を模索しはじめた姿でもあった[82]。つまり前述したような、〃なつかしのメロディー〃的回顧や、過去の歴史を媒介として現実政治を論ずる「史論」的回顧等と合せて、さまざまな意味合いを含みつつ、全体として二〇年代は「歴史の時代」となったのである。

（1）「島崎藤村全集」（新潮社版）第一八巻一八一頁。
（2）同右、第一四巻「文学に志した頃」三一八頁。
（3）杉山平助「文芸五十年史」昭一七刊、二三〇頁。
（4）遠山茂樹他編「近代日本思想史」第二巻昭三一刊、二六一頁より再引。
（5）『国民之友』巻頭言、第一号（明二〇・二）。無署名だが蘇峰筆。
（6）明治一九年末刊行の尾崎行雄の政治小説の題名であるが、二〇年代初頭非常に多く使われた。
（7）田岡嶺雲「明治第二十八年の劈頭に於て青年の多望なる運命を想ふ」『田岡嶺雲全集』第一巻所収、三〇五頁。傍点は岡、以下

ことわりなき限り同様。なお田岡ははじめ「日本人」「亜細亜」に多く寄稿し、国粋派に近い立場の評論家としてスタートした。

(8) 「徳富蘇峰集」『明治文学全集』第三四巻所収。一三一頁。

(9) 山路愛山「英雄論」「女学雑誌」二四七号、明二四・一・一〇。『明治文学全集』三五巻、『愛山文集』所収。以下愛山の著作は著者名を省略し、上記の二書は『愛山集』『文集』と略記する。

(10) 植村正久「政治主義に関する管見」『日本評論』四号、明二三・四・二六。『植村正久著作集』第二巻、一二四頁。

(11) 北村透谷「人生に相渉るとは何の謂ぞ」『文学界』二号、明二六・二・二八。『透谷全集』第二巻、一一三頁。

(12) 陸羯南「来路を顧みて前程を卜す(一)」『東京電報』明二二・一・一。『陸羯南全集』第一巻、六四五頁。以下この書は『全集』と略記して引用。

(13) 陸羯南「近時政論考」明二四刊。『全集』第一巻、三九頁。ちなみに羯南は同書の別の所で「我が国民論派の欧化主義に反動して起りたるは、猶ほ彼の国民論派の仏国圧制に反動して起りたるが如きのみ」(同前六六頁)といっている。とすれば「国民論派」も福沢等と同じく「反動的論派」であり「其の正を得ること難し」ということになるのだろうか。

(14) 陸羯南「政党の争を行政部に混入すべからず」『東京電報』明二二・九・三〇。『全集』一巻、五四四頁。

(15) 「反動」の語が出てくる箇所として『全集』一巻、三五〇頁、四三一頁、五五二頁、五七六頁、等がある。

(16)(17)(18) 「保守的反動の大勢」『国民之友』第一〇号、明二〇・一〇・二一。無署名であるが蘇峰筆と推定されている。

(19) 何故このように「保守」と「反動」が早くから癒着してしまったかは、それ自体近代日本政治思想史の興味ある問題であるが、さしあたり「保守的反動」の造語者としての蘇峰に即して考えてみると、彼の「進歩」観との関連が重要と思われる。「将来之日本」などに典型的に示されているように、蘇峰は歴史の進歩のプロセスを単線的・一方向的な「進歩」とみる傾向性が強い。そうした直線的な進歩史観にあっては、進歩・保守・反動は一直線上にならぶものとして意識され、保守と反動のちがいよりは、進歩と対比しての両者の親近性の方が強く意識され、両者が癒着しやすいわけである。なお愛山との比較は次章参照。陸羯南の場合には、力学的イメージの濃い「反動」観念が多く使われるが、「保守」と「反動」ははっきり区別され、「保守的反動」なる語は使われていないようである。

(20)(21) 竹越與三郎「新日本史」上、明二四刊。『明治文学全集』第七七巻、八四頁。

(22) 「反動」の登場するダイナミックスについては、たとえば丸山真男「反動の概念」岩波講座『現代思想』V、昭三二刊所収、

参照。

(23)～(31)　竹越「新日本史」中、明二五刊。『明治文学全集』七七巻、一六六～一六八頁。

(32)～(35)　竹越「情感の教育」『国民新聞』明二六・九・一〇。『明治文学全集』三六巻、一三二頁。

(36)～(41)　鷹陵外史「情感の世界」『国民之友』一六号、明二二・二・一七。

(42)(43)　陸羯南「家族的生活及び政治的生活」『東京電報』明二一・九・二六。『全集』一巻、五三七～五三九頁。

(44)　森鷗外「しがらみ草紙の本領を論ず」明二二・一〇。岩波書店新版『鷗外全集』二二巻、二七頁。

(45)　星野天知「漢学辨」『女学雑誌』二五三号、明二四・二・二一。

(46)　田岡嶺雲「青年文学者の自殺」明二八、前掲『全集』一巻、三三五頁。

(47)　宮崎湖處子「人生私観」『国民之友』二一九号、明二七・三・三。

(48)　「恋愛論」『国民新聞』明二七・三・九。

(49)　この『情』第一号の書評が『国民之友』三三号（明二二・一一・二）にあり、「其表紙に良心及感情之勢力拡張、倫理道徳及宗教之遊軍と自称し真情の発達を期図せる雑誌なり」とある。なお『六合雑誌』九五号（明二二・一一・一五）にも同誌の紹介があり、「情は六合雑誌を父として云云」と自称していたことがわかる。

(50)　棲月子「日本の思想界に於ける情」上下『女学雑誌』三三六号（明二六・一・一四）及び三三七号（明二六・一・二八）。棲月子（下の方は棲月生となっている）は戸川秋骨の筆名である。

(51)　前注(3)と同じ。

(52)　この点に関してはさしあたり、笹淵友一「浪漫主義文学の誕生」昭三三刊、久山康編「近代日本とキリスト教〔明治篇〕」昭三一刊、の第三章「欧化主義とキリスト教」等参照。なお佐波亘編「植村正久と其の時代」にもこの点に関する資料が含まれている（たとえば第五巻の一一）。

(53)　西田長寿「明治時代の新聞と雑誌」昭三六刊、二三五頁。

(54)　同右、二〇五頁以下。

(55)　以上にあげた雑誌の創刊・性格等についても前注(53)の西田氏の書参照。

(56)　この点に関しては蘇峰の当時の文章の他、鹿野政直「資本主義形成期の秩序意識」昭四四刊、の関連章を参照。

(57) この書は明二三・六、民友社刊。その中には「故郷には我慰籍を思ひ、村落には我平和を期せり。慈愛、友誼、恩恵、親切、歓情等、人間の美徳と称するものは、村落の外何處に求むる」(『明治文学全集』第三六巻所収、四五頁)といった言葉と共に湖處子の故郷の田園風景が清新な筆致で描かれている。ただし注意すべきは柳田泉氏が前掲書「解題」で指摘しているように、この故郷は「実は現実のそれではなく、最初から詩人的ロマンチシズムで純化され、浄化された故郷」なのであって、前引竹越三叉の指摘する「文明開化」への「反動」として「詩歌的の感懐を以て歴史の時代を回顧」するのと対応していることである。つまり三叉の指摘がいわばタテ(時間)に過去の歴史をロマン化したことをさすのに対し、これはヨコ(空間)に田舎をロマン化しているわけである。

(58) たとえば「日本人」「亜細亜」には北海道開拓に関する記事が多い。なお前注(56)の鹿野氏の書及び鹿野「陸羯南・三宅雪嶺」解説(『日本の名著』三七巻)等参照。

(59)(60) 陸羯南「地方的運動と藩閥との関係」(『東京電報』明二一・六・六。『全集』一巻、三九一頁。

(61) 徳富蘇峰「隠密なる政治上の変遷(第五)」(『国民之友』一九号、明二一・四・六。『蘇峰文選』所収、六五頁。

(62) 頼山陽の村瀬藤城宛書簡、天保元・一〇・一八付、『頼山陽書簡集続編』三八五頁。

(63) この文は愛山の「戦国策とマキャベリを読む」(『国民之友』三六一号、明三〇・九・一〇)に序詞として付せられ、本文中にも引かれている(但し『愛山文集』収録分には序詞がない)。『国民之友』一五八号(明二五・六・二三)「雑録」欄に「フリーマン氏につきて」という無署名の一文があり、その中にフリーマンの友人筆の文の一節として「氏常に云ふ、歴史は過去の政治にして、政治は現在の歴史なりと」と書かれている(「フォトナイトリーレヴュー」にのったとある)。フリーマン Edward Augustus Freeman (一八二三〜一八九二)は、イギリス・ヴィクトリア朝時代の著名な歴史家であるが、この言葉の出典は未詳。なお彼の死に際して『国民之友』が直ちに右の追悼文をのせていることは、後注(75)でふれるヴィクトリア朝英国と明治日本との同時代性を考える上で興味深い。

(64) 大江逸「泰平世界英雄嬾」(『六合雑誌』七一号、明一九・一一・三〇。大江逸は蘇峰の筆名の一つで本誌目次には徳富猪一郎となっている。彼が Change of generation という語をどこから学んだかは未詳。

(65) 蘇峰「新日本之青年」(『明治文学全集』三四巻所収、一一八頁。

(66) 同右、一二四頁。

(67)(68)　同右、一一八頁。
(69)(70)　同右、一二〇頁。
(71)～(73)　同右、一二一頁。
(74)　この点に関しては、岡和田常忠「青年論と世代論――明治期におけるその政治的特質――」『思想』昭四二・四、参照。
(75)　しかし我々はメタルの裏もみる必要がある。本文でもしばしば紹介したように、蘇峰をはじめとする「明治ノ青年」達の多くは「文明開化」を「功利主義」「唯物的文明」「物質的文明」「無味乾燥」「極端実利の乾燥時代（ドライ・エーヂ）」ととらえ、それへの反動として「情」や「精神的文明」「精神的改革」を強調することを、文明開化をになった「天保老人」に対する「明治青年」の世代的自己主張と結びつけた。だが忘れてならないことは、「文明開化」の右のような把握はあくまで彼等「明治青年」のイメージであって、それがどこまで「文明開化」の客観的実態に即したものであるかは別問題である。ある意味では彼等が（実態の如何にかかわらず）そうしたとらえ方をしたからこそ、右のような自己主張が可能となったといえるかもしれない。つまり彼等が前述のような世代的自己主張をするためには、文明開化期を是が非でも右のようにとらえる「必然性」があったのではないか。彼等が文明開化期の「天保老人」の代表として、福沢諭吉を批評する時、そこにはおどろくべきステレオタイプがみられる。たとえば徳富蘇峰は「泰西表面の文明たる物質的の知識は福沢君に依って案内せられ」（「福沢諭吉君と新島襄君」『国民之友』一七号、明二一・三・二）「翁〔福沢〕は恒に文明を唱ふ。文明とは何ぞや、電燈あり、電話あり、新聞あり、国会あり、警察取締り厳にして、盗賊放火なく、……人々日新の智を応用して、身辺の快楽を進捗す。惟ふに斯る境遇をは、翁の所謂文明社会とは申すならめ。……物質的生活に、直接の関渉を有する科学に就ては、翁は最も多くの興味を有す。されと高尚なる文芸、技術、宗教、哲学等に就ては、殆んと無頓著の看なき能はす」（「妄言妄聴」明二八、『蘇峰文選』四一九頁）といい、山路愛山は「福沢君の天職は日本の人心に実際的応用的の処世術を教ふるに在り。……人は唯善く生活するを以て満足する者に非ず、人の心の深き所には溫飽に満足せざるものを有す。是故に世は宗教を要す、此故に世は哲学を要す、而して福沢君は之を教へざる也。……世若し福沢君の説教をのみ聞きたらんには、此世は棲息するに足らざる也」（「明治文学史」『国民新聞』明二六・五・七）といい、竹越三叉は福沢を「英国の民政、米国の物質的進歩を一身に代表せる者」で「福沢の指導によりて社会に入り来る文明開化なる者は、一の物質的民政主義が、凡てのものに色を染めんとする主義」（いずれも「新日本史」上、明二四刊、前掲『明治文学全集』七七、一四七頁）だとしている。その他「孳々として物質的の進歩の進達を助け……泰西の文物に心酔したるものにはあらずとするも、泰西の

外観的文明を確かに伝道すべきものと信じたり……彼〔福沢〕の改革は寧ろ外部の改革にして、国民の理想を綿導したるものにあらず」(「明治文学管見」明二六、『透谷全集』二、一七二～三頁)といったのは北村透谷であり、福沢とその一派をさして「毫も抽象的原則または高尚の理想」を有しない「浅近なる実利的論派」(いずれも「近時政論考」明二四刊、『全集』一巻、四〇頁)とよんだのは陸羯南であった。彼等がその資質・立場を異にしていながら、福沢イメージにおいていかに共通しているかは明白であろう。もとより彼等の指摘はたしかに福沢のある面をついている。だが「国の文明は形を以て評す可らず。学校と云ひ、工業と云ひ、陸軍と云ひ、海軍と云ふも、皆是れ文明の形のみ。この形を作るは難きにあらず」(「学問のすすめ」五編)といい「外の文明はこれを取るに易く、内の文明はこれを求るに難し。……故に云く、欧羅巴の文明を求るには難を先にして易を後にし、先づ人心を改革して次で政令に及ぼし、終に有形の物に至る可し。……此順序を倒にすれば、事は易きに似たれども、其路忽ち閉塞し、恰も墻壁の前に立つが如くして寸歩を進ること能はず」(「文明論之概略」第二章)といい「人間世界は人情の世界にして道理の世界に非ず。其有様を評すれば七分の情に三分の理を加味したる調合物とも名づく可きほどのものにして、人事の軽重に論なく其大半の運動は情に由て制せられざるものなし」(「政略」明二〇・八・一五、『福沢諭吉全集』一一、三三三頁)といっているのが、ほかならぬ福沢諭吉その人であることを知る時、あの著名なマルクスの嘆息――「私はマルクス主義者ではない」――を思い起し、歴史の皮肉を思わずにはいられない。(これと似た事情はおそらく、三〇年をへた「戦後民主主義」についてもいえるであろう)。なおつけくわえれば、前述のような文明開化や福沢についてのイメージ形成に際しては、彼等「明治ノ青年」達の多くが愛読した、トマス・カーライル等のいわゆる Victorian Critics of Victorianism の影響も考える必要があると思われる。彼等は一九世紀初頭のベンタムらの「哲学的急進派」の運動とその背景をなす産業革命のもたらしたインパクトへの「反動」として登場したのであり、その功利主義やベンタム等に対する批判は、「明治青年」達の文明開化批判・福沢批判に言々句々照応する面がある(この点に関してさしあたり Emery Neff, Carlyle and Mill――An Introduction to Victorian Thought. 邦訳未来社刊や、ミル自伝等参照)。このヴィクトリア朝英国と明治日本の思想的同時代性ないし照応関係については、北大法学部の同僚松沢弘陽教授から教えられた。

(76) 島田三郎「開国始末・井伊掃部頭直弼伝」明二一刊、「緒言」『明治文学全集』七七所収、二八八～九頁。

(77) 「江戸会」『江戸会雑誌』『江戸会誌』については、柳生四郎・朝倉治彦編「幕末明治研究雑誌目次集覧」昭四三、参照。同書には右の二誌及び「維新史料」の全目次が収録されている。なお『江戸会誌』の紹介が『国民之友』六一号(明二二・九・二)に

ある。ちなみに明治二二年は徳川家康が天正一八年江戸入城から三百年にあたっていた。

(78) たとえば徳富蘇峰は明治一九年に書かれた「将来之日本」において、日本の「封建社会」を「徹頭徹尾、社会ノ生命元気ナルモノハ唯一ノ武力ニシテ……恰モ今日ノ常備軍制ヲハ全国人民ニ推シ及シ、今日ノ常備兵営ヲハ全国ニ拡充シタ」ようなもので「全国皆兵営ナリ、全国人民皆兵士ナリ」とし、この「軍隊組織ノ社会」においては文化もまたその影響をうけており「我邦ノ如キ貧国ニシテ何故ニ斯カル一国ノ身代ニ不釣合ナル高尚ノ美術ハ生シタル乎。唯貴族的ノ需用アルカ故ナリ。而シテ此ノ需用ナルモノハ何故ニ生シタルヲ得タル乎。平民的ノ困乏アルカ故ナリ。即チ錦緞。綸子。綾。錦等ノ精功ナル織物ヲ製造シタルハ、是レ我邦人民ノ艱窶サヘ繼フ能ハサルモノアリタレハナリ。九谷焼ノ絢爛タル陶器ヲ製造シタルハ、是レ我カ人民ノ貧乏徳利ヲモ有スル能ハサルモノアリタレハナリ。……果シテ然ラハ此等ノ美術品ハ実ニ我カ封建人民ノ苦痛ト怨恨トヲ其子孫タル吾人ニ説明シ、旦ツ之ヲ記臆セシムルノ保護者ト云ハサル可ラス」といい、この「大野蛮大圧制ノ社会」を鋭く批判した（いずれも前掲『明治文学全集』三四、九四、九六～七頁）。しかるに明治二六年刊行の「吉田松陰」にあっては、「封建社会の重なる害は、其の世襲制と、割據的とにあり」としつつも「其の重もなる利は、其の地方自治制と、国家的社会制にあり。……国の本は民にありとは、封建社会に於て、一般に通用する格言なりき。……封土の分割は、自然に地方自治の傾向を生じ、世襲の制は……牝鶏を殺して肉を食むの現金政治を去りて、憮恤恵養、民富みて君主富むの政治となる。……概して論ずれば徳川時代の封建政治は、我が国民に取りては、開闢以来無上の善政たることは、吾人が敢て断言する処。……人或は徳川幕府の顚倒を以て煩取苛求、万民疾苦に堪へざるが故に、始めて尊王論を藉りて、其の反抗の端を発きたるものとなし。恰も維新革命を以て仏国革命と同一視し、強ひて影像的暴政を描くものありと雖も、是れ其の眼孔未だ社会の表裏に徹せざるものと云ふ可し」（いずれも前掲書一六八頁）というに至り、さらにすぐ次に引く文まで書かれるようになる。こうした現象は一人蘇峰にとどまらず、他の思想家にもみられる。

(79) 「徳川時代の歴史」『国民新聞』明二六・九・二〇。無署名であるが、「文章世を経せずんば、妙と雖も益なき也」といった言葉があるので、徳富蘇峰か山路愛山のいずれかに相違なく、文体語調の感じからは蘇峰の可能性が大きい。

(80) いわゆる「文明史」的見地からの日本歴史の書物は前からあるが、この時代になると一方でのアカデミズム史学の成立（後述）や、他方での雑誌ジャーナリズムの隆盛（前述）等により、きわめて多種多様な見地からの日本歴史が攻究され刊行される。前者の系列上の一例として、明治二二年『史学会雑誌』（後『史学雑誌』と改称し現在に至る）発行、二三年重野安繹、久米邦武・

星野恒らによる「稿本国史眼」の刊行等があり、このころから古文書等基本史料の収集整理もすすめられる。又「古事類苑」(明二九)「国史大系」(明三〇)等の刊行がこれにつづく。後者の一例として、明治二四年、田口卯吉による「史海」発刊をきっかけに「史学普及雑誌」「史論」「史海雑誌」等の雑誌刊行、「日本歴史画報」「日本歴史全書」からついには「少年史海」まで刊行される。

(81) 「同時代史」は後の三宅雪嶺の書名でもあるが、この時代には後述するような「第二之維新」への変革期待もあって、明治維新の解釈や、その後の歴史的展開への関心が高まり、これまでもたびたび引いた竹越「新日本史」(上は明二四、中は明二五、下未刊行)をはじめ、陸羯南「近時政論考」(明二四)、指原安三「明治政史」(明二五～六)、坪谷善四郎「明治歴史」(明二六)、山路愛山「明治文学史」(同前)、北村透谷「明治文学管見」(同前)等が書かれた。

(82) Cultural Identity の問題を軸として、民友社派と政教社派を対照しつつ、二〇年代の思想史をとらえた研究書として、Kenneth B. Pyle, The New Generation in Meiji Japan——Problems of Cultural Identity, 1885—1895. 1969. があり、本稿執筆に当っても示唆を得る所が多かった。ただし著者が民友社派の日本歴史からの疎外と西欧文化への讃美を強調している点(たとえば同書 p. 166)は、後述する通り問題であり、同意しがたい。